

# そ の 他

## 私の軍隊体験

山口県 永浜 暁

### 一、現役時代

私は、昭和十四年五月一日現役兵として山口歩兵第四十二連隊第四中隊に入営しました。

下士候補身のバイタリティ溢れる末益少尉の特訓を受け、第一期の検閲を完了しました。直ちに同年兵の大半は本隊に転属、一部の者は召集兵と古参兵で新設部隊を編成、任地に赴きました。

残留した私たち同年兵三十名は、相談して人事係の古城准尉の所に野戦行きの陳情に行きましたが、准尉

は「お前を残したのは選抜して残した、内地勤務も外地勤務もお国の為になることに違いない、お前達は将来の補充隊の中堅になって貰いたい。」と言われ、諦めざるを得ませんでした。程なく私たちは一等兵に進級し、あこがれの衛兵につくようになりました。

昭和十五年四月二十一日、上番風紀衛兵の弾薬庫歩哨として服務中、週番司令の早川中尉の巡察を受け、問われるまま応答しました。早川司令より中隊に通報があり、中隊長・野下節次中尉より賞詞を戴きました。昭和十五年十一月一日陸軍上等兵を命ぜられました。同年十一月十日松山方面において、上陸演習が行われ、実戦さながらの攻防戦を展開し、二日間の大演習の幕を閉じました。

昭和十六年九月二日、九州博多を中心に小倉より早

岐まで内地部隊が布陣し、外地部隊が上陸して来るのを阻止する演習なのですが、野戦の将校さんは殺氣立っていて日本刀を振りかざし陣地に突入、本当に切られるのではとヒヤヒヤしました。この演習は太平洋戦争を想定しての大攻防演習でした。

同年十一月二十二日現役兵を満期除隊帰郷し予備役に編入されました。

## 二、在郷軍人および徳山造船時代

昭和十七年一月より徳山造船株式会社に入社、五人組の班長を任命されました。

当造船所は、軍の要請により設立されたもので徳山地区の各造船所が、施設の一部を持ち寄り設立した会社で、社長は戦後山口相互銀行の頭取になられた国広幸彦氏で私の長兄永浜智里が取締役工場長を務めておりました。

工員は百名位で、主として戦時標準型木造船を建造しておりました。

昭和十七年三月より嵯島青年学校の助手を、教頭の要請により勤めていましたが、昭和十八年九月三十日

県より正式に辞令を受け、青年たちを指導しておりました。

## 三、召集南鳥島時代から復員まで

昭和十八年十一月二十日、召集により独立混成第五連隊第九中隊に入隊しました。そのころ状況が悪く、好期の来るまで原村八本松の演習場に移り、待機訓練に明け暮れていました。

そのころ、第二小隊に名前は忘れましたが、現役時代山口で連隊の暴れ者で野戦に行き、人事係に進級を強要し、上等兵になったという曰く付きの上等兵が私たちと一緒に入隊したのです。

入隊以来一か月過ぎても軍服を着ず私服で過ごし、連隊中のそういう連中を集めて博打をし、堂々と衛門を出て八本松の町で芸者を揚げて大散財、中隊長が注意すると突然、中隊長の刀を奪って暴れ出し、「憲兵隊に通報するならして見よ、貴方の家族には必ず仕返しをする」と言って、軍医に精神病と診断させ召集解除になりました。

昭和十九年四月八日、広島出発、四月十日芝浦より

三千トン位の貨物船（船名は記憶なし）に兵員六千名と食糧・兵器・弾薬等を満載して足の踏み場もない。時々外に出て息をつく。荒天でしたが気が立っているので船酔いする者はいなかった。

途中、父島、母島に寄港し、硫黄島を遠望して一路南鳥島目指してジグザグ行進が続ぎ、敵潜水艦を避けるため大廻りして航海するので普通一週間で着く所を二十三日掛かり五月三日南鳥島に上陸しました。

直ちに、兵器・弾薬・食糧の陸揚げが交代制で行われました。人力でやるので中々と捗らず完全に終わったのは五月十九日でした。

翌二十日、陸揚げを待っていたように敵機動部隊が来襲、十隻位の巡洋艦が島をグルグル廻りながら、艦砲を発射、地上の建物は一軒残らず木っ端微塵となりました。皆壕の中で、戦々兢兢として小隊長の指示を待つ。艦載機は地上スレスレで機銃掃射を行い被害甚大でした。

中隊長命令で小銃手も艦載機が真つ向より来る時は少し前方を射と命令が出ました。

とにかく、小銃を抱いて待っているのは恐ろしいのです。こちらから射つと気分的に度胸が付いて来ます。この戦闘は丸二日続きましたが、敵は上陸する気配はなく悠々と引揚げて行きました。

敵艦載機十機以上墜落と発表がありました但我が方も被害甚大でした。戦死者の数は発表されませんでした。だが、相当数の戦死者があったことは想像出来ました。ただし、陸揚げした兵器・弾薬の半数以上を失ったので明日より食事の量は半減にすると発表がありました。以来、内地よりの補給は時々潜水艦が来て接岸すると危険なので、ゴム袋に入れた干飯を風上より流し、拾い集めて配給されました。半分も手に入れば良い方です。徐々に食糧は不足して来ました。

滑走路の周りに排水溝を設けそれを地下タンクに溜め飲料水にしていましたが、度重なる空襲により滑走路も寸断され、飲料水にも困るようになりました。幸いにしてこの島には一日一回は猛烈なスコールがあり、敵の来ない時は全員丸裸になって水浴もするし飲料水も確保しました。

十一月一日、陸軍兵長を命ぜられ、併せて下士官勤務と兵科精勤賞を授与され、即第二小隊第三分隊長を拜命、部下五名を任されました。

昭和十九年十一月十日の空襲は熾烈を極め、分隊員と共に防空壕に入っていました。至近距離に爆弾が落ち、その破片が壕の角に当たり、私はその内側に縋り着いていたのですが角が中に崩れ込みました。幸いにして余り大きな破片でなく、角に雑のうを、その外側に水筒を掛けておりましたので水筒がへっこんで、二、三日腰が痛かったですみました。

しばらくして、大津郡出身の上等兵がやられたというので行つて見ると、肩から血が吹き出していた。肩に手が入る位の穴が開き、一時間したら戦死しました。下を見ると破片が落ちていました。

この爆弾は地上十メートルで炸裂して縦に裂け回転して落ちて来ます。裂口は斜めになっていますので多大な被害を与えます。この壕の上には高さ一メートル、大きさ五十センチ位の空気抜きがあり、横に十センチ置き位に鉄のサンが入れてありました。十センチの穴

から回転しながら入って来て肩に当たりえぐったのです。本当に生と死は隣合わせということが判りました。昭和二十年になりサイパン・テニアン・フィリピンが占領され、ますますB29による空爆は頻繁となり、毎日のように爆弾を投下し悠々と帰って行きます。情けないことには友軍には敵機の高度に到達する砲がなく、時たま低空で来て撃墜したことがありますが、ごく僅かです。

各自の体力も日増しに低下し、私も現役当時は五十キロありましたが四十キロ位に低下してしまいました。ただ、気力だけは旺盛でした。

食糧を補うため自分の壕の回りに内地から持ってきたカボチャ・トマト等を植えたのですが、折角実がついても熟れない内に他の隊の者に持って行かれ、そんなことなら茎を食べようと湯がいて食べたことです。

とにかくあらゆる物が不足し、便所に行つても紙がないのでフキに似た葉で代用しました。マッチも全部使い果たしたが幸いに私の分隊にレンズを持った者がいたので重宝しました。もう一つ困ったことには燃料

にする木がなくなったことです。島の回りには三重にも四重にも戦車壕が掘ってあり、また所々に地雷も埋めてあり、付近に近付くことは中隊命令で止められていました。島で二か所ぐらい安全な通り道を知っていましたが、夜、流木や海藻等を拾いに行きました。

海に入れば貝類や海藻があると思っただけですが、何時空襲になるやら知れないので遂に実現出来なかった。その代わり陸にヤシカニがいたので取って帰り、焼いて食べたものである。案外美味であったのを今でも覚えています。また内地の鳩位の鳥がいたがこれも終戦当時には数える程になっていました。軍属の人が犬や猫を飼っていたのですが終戦時には一匹も見当たらないようになっていました。遂に手持ちの食糧の発表があり一人一日一合で一か月分しかないということで皆がびっくりしました。

これからの記事は終戦になり部隊の解散時、連隊長より帰郷しても決して人に話してはならぬと固く口止めされていたのですが、もう五十年近くにもなりますので敢えて発表します。

名前は忘れましたが、部隊編成当時の連隊長は六十一歳で大佐でした。昭和二十年になって大佐の定年が来て少将に昇進されました。戦争末期になり食糧不足による栄養失調で動作の鈍い兵を見て、「士気がたるんでいる、各個教練から教育を仕直せ」と命令があり、上等兵以下の兵隊を毎日三時間間位教育の仕直しをしました。内地と違い日中は四十度位に気温は上昇します。それで三分の一位は日射病で倒れこれが原因で戦病死した兵隊は数多くありました。

また内地と同じく衛兵所を設け、連隊長が出入りする時には敬礼と大きな声で叫ばなければ衛兵司令を平手打ちしていました。海軍にはこういう制度はなく、夜中に大声で敬礼と言われては安眠妨害であると嚴重な抗議があり、副官の説得で再教育も衛兵所も取り止めに兵隊も楽になりました。

また将校の会食の折、ずっと皆の食器を見て廻り、当番の兵長に俺の飯が一番少ないとすごい剣幕で叱り付け、余りの事に副官がなだめてやっと納まったと当番の兵長がいました。

終戦三日前位になり、突然連隊長は昨夜心臓発作のため急逝されたと会報が出ました。しかし真相はそうではなく戦車隊の隊長（士官学校出の二十七歳の大尉）が「このチップケな島を守る必要はない、今ソ満国境が危ない。その方に転進するよう大本営に打電して下さい」と（南鳥島は硫黄島の栗林中将の指揮下にあつたが硫黄島玉砕のため大本営直轄となる）意見具申した。それで口論となり戦車隊長が拳銃で射殺したらしいと噂が流れ、程なくたつた一機残っていたゼロ戦で戦車隊長は内地に護送されました。後で聞いたのが死刑にはならなかつたそうです。

私たちが考えても終戦前の日本に一個旅団の兵員を輸送する船があつたとは考えられません。連隊長の後任には、これも名前は忘れましたが中佐の方が連隊長にられました。昭和二十年になり燃料が無いため戦死者が火葬出来なくなつて、海軍式に小指を切つて遺し身体の方は水葬にしました。

八月十五日に会報で、終戦のラジオ放送があるといふので行つて見たのですが、雑音が入り陛下の申され

ることは判りませんでした。しかし、夕方になり会報が出て、「日本が無条件降伏」と聞き信じられませんでした。これで今晩から安心して寝られると思えばどうでも良いと言ふ気持ちでした。

そのうち九月になり相変わらず食糧はありません。各自が海岸に出かけ貝・海藻等を取つて帰り、調理して食べ空腹をいやしました。

九月一日付で伍長に任せられました。戦争に負けて何が進級かと思ふ気持ちで一杯でした。

軍上層部で船を作つて魚を獲ろうということになり、連隊中から私を含め五名の元船大工が集まりました。直ちに材料と大工道具を各中隊より提出、私が班長になり船作りを始め、簡単な手漕舟なので十日位で出来上がり、沖繩独特の追い込み漁で大漁となり、各中隊に配給しました。しかし全員が腹一杯になるだけの量ではありませんでした。

そのうち日はよく覚えていませんが、米軍のスマス中佐（この人の名前は今でも鮮明に覚えています。何しろ命の恩人ですから）率いる一隊が上陸してくるこ

とが決まり、手出しをしてはならぬと会報ができましたが、すでにあらゆる武器・弾薬は米軍の命令で海中に投棄していました。

遂にスミス中佐以下一個中隊位の兵隊が雑然と上陸して来ました。一応自動小銃は持っているのですが手にしている者、胸に抱いている者などガムを噛みながらの上陸で軍規厳正ではありませんでした。

我が連隊長は家宝の国宝級の銘刀をスミス中佐に贈呈しました。それでスミス中佐の心情を良くし、米軍は我軍の無縁を傍受して南鳥島には食糧が無いということを知っていたようで、一週間後、我々が二か月食べられる位のカリフォルニア米を巡洋艦で運んでくれました。

また、間食にはレーションという携帯食を一日三個配給してくれました。これでぐんぐん体力が付き現役時代の体重に戻りました。遽に米軍の二世が良く遊びに来ていました。冗談半分に貴方は日本とアメリカのどちらが勝つと思ったかと問いますと、暫く考えて日本が勝つて良いと思ったが兵器が違ふ。だから最終的

には日本が負けるだろうと思ったといっていました。

米軍は我々を捕虜扱いせず友人として遇してくれました。米軍は我々を使役に使うことなく、どんどん島は見違えるように変貌してゆきました。一番最初に建設したのは便所です。細長い家が出来まして、中に板でこしらえた樋が海に向かっています。大分傾斜して付けてありましたがまだ何やら判りません。一メートル余りに仕切りはありましたが戸はありません。完成すると米軍の兵士が板にまたがってヒザに毛布を掛けて本を読んでいます。やっとならそれで水洗便所と言う事が判り大笑いでした。

飛行場は使用出来ないように寸断されていましたが、大きなブルドーザー（我々は名前を知らなかったが二世が教えてくれました）四台で一週間位で飛行機が発着出来るようにしました。

木工仕事をすると、当時日本には無かったがドリル・丸鋸・電気鉋等を見て科学の遅れをつくづくと感じさせられました。

十月七日、本土帰還のため南鳥島を出発。途中船酔

者が続出しました。この航海の前、北海道より内地に大豆を積んだそうで船底に多くこぼれていました。始めは何とも思わなかったのですが、どうも目が痛い。それが全員です。二日位すると目がかすんで良く見えない。全員礬酸で目をたたいて、船室の中へ入らないようにしていた。小笠原あたりから見えるようになりやれやれと安心しました。

十月十九日、浦賀帰港、召集解除。直ちに貨物列車で横須賀出発。思い出の地・西条、八本松間は列車不通のため各自荷物を担いで歩いていると、地方人が兵隊さんご苦労でした荷物を持ちましようというので親切にと御願いましたが、荷物を受け取る時に十円要求されましたのには驚きました。

南鳥島では金を使うことはないので、全額送金していましたが家に届いていない。世話部に行つて見たが判らず終いです。一年半喰わずのただ奉公に終わりました。

## 若き日の追憶

岡山県 大森 学

### 再度召集令状

支那事変から召集解除になったのが、昭和十六年五月であった。母は、私の出征中の二年間、雨の日も、風の日も、一日も欠かさず五時に起きて三キロある氏神様に、武運長久を祈願してくれたことを、帰つてから聞いた。

今度帰ったら、どうやって母を安心させてやろうか、そんなことを思いながら、元の会社「株式会社藤田組・棚原鉱山」へ復職し、前沢参謀の命を守り銃後の戦士として活躍を誓った。

帰還後半年が経過した。十月には東条内閣が成立したが、米国との関係は悪化するばかりで、ついに十二月八日、暗黒の大東亜戦争に突入したのであった。

いっお召しがあるか分からない情勢の中、大阪の本